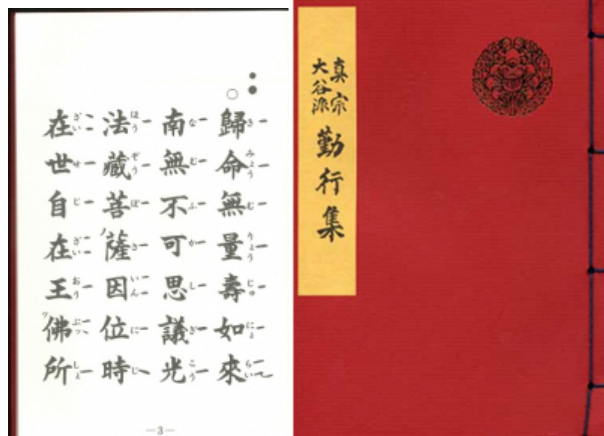


浄泉寺報

第28号
2022年
春彼岸



「真宗大谷派勤行集」(通称赤本)と正信偈

お彼岸に想う

浄泉寺住職 望月廣三

亡くなった人のことを何故「仏さま」というのだろうか？若い頃です、こんな疑問をいただいたことがあります。「仏さま」とは言い換えれば「仏」です。仏とは真実に目覚めた人のことです。となると、亡くなった人は「真実に目覚

めた人」だとなります。え？これはおかしいんじゃないか、とどうしても合点が行かなかったものです。

しかし、こうした疑念は大切ですね。なぜなら、疑ったおかげで、「仏さま」の意味が理解できたのですから。何事も鵜呑みにしては駄目ですね。

ある研修会場でした。講師の先生が、「仏さまという呼び名は平安時代からはじまったそうだが、この原意は「解ける」です。

「ほとけ」とは解ける、つまりさまだまな苦から解き放たれることなのです」と言われたのです。私はびつくりしました。え？ほとけとは苦から解き放たれることだったのか…と。意味があるんだなあ、と感心させられました。が、それですべてが解決したわけではなかったのです。さらに大きな深い疑問が湧き出てきたので

す。

それは苦の問題でした。苦の正体でした。苦しみに正体があるなんて思いも寄らなかったのですが、「在る」のですね。それは「執われ」です。つまり固執です。苦の正体は固執なのです。一つ悩みが出てきますと、それに執われ、どんどんふくらんで行きます。この執心からの解放を解ける、「仏さま」だと言われたのです。さらに次号で詳しく。



浄泉寺からのお知らせ

● 同朋会 (月例法座) ●

浄泉寺では、毎月お勤めと住職の法話を中心にした同朋会を開催しています。どなたでもお気軽にご参加いただけますので、ぜひお越しください。日程等の問合せは浄泉寺まで。

・ 若坊守のひとりごと ・

私は今、保育士として働いています。様々なハンディキャップを抱えている子ども達がいて、その子達と過ごしながら思うことがあります。

仏説阿弥陀経の中に「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光」という一節があります。阿弥陀仏の浄土に咲く蓮の花、つまり私達ひとりひとりがそれぞれの色を持ち、光輝いているということだそうです。歌手の槇原敬之さんが「世界に一つだけの花」をこの一節から作ったことでも有名になり、他人と比べなくてもそれぞれが素晴らしいという意味で知られているかと思っています。

しかし私は、子ども達について「青は青でしかいられない」という人間の悲しさを感じています。どんなハンディキャップを抱えて生まれても、自分は自分でしかないという悲哀を私達は抱えて生きています。他の色にはなれない、他の命は生きられない。もし可能なら違う命になりたい、なつてほしい。そんな私達の煩惱をこのお経の一節は知らせてくれているのではないのでしょうか。

(浄泉寺若坊守・釋尼彌名)

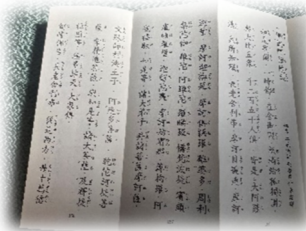
お内仏（仏壇）に座る ②⑥ ～ お経 ～



お経の本（左）と「正信偈」が掲載されている通称赤本（右）彼岸参り等で読む『正信偈』はお経ではなく、教えに出あった感動を親鸞聖人がうたったもの

浄泉寺では、三回忌、七回忌といった年忌法要（法事）の場で、「如是我聞」からはじまる『仏説阿弥陀経』というお経をお勤めします。「如是我聞」とは、お釈迦様が説かれた教えを弟子が「私はこう聞いた」という形でまとめていったお経のあり方を表す言葉です。このように教えは、私一人の責任で聞き、受け止めていくものなのです。お経の「経」には、“たて糸”という意味があり、時代を超えて貫く「真理」を表します。真理とは、私たちの姿を良いも悪いもありのままに教えてくださる仏様のはたらきといってもいいでしょう。自分のことは自分が一番わかっているようなつもり

で生きている毎日ですが、どうがんばっていても自分の姿を自分の眼で見ることは叶いません。ところが、そんな自分の姿を鏡のように映し出してくれる教え（＝仏法）がお経には説かれているので、お経は「鏡」にたとえられます。つまり、ご法事でお経を聞くのは、法事に集った私たち自身であり、亡くなった方をご縁に、お経を鏡として、私自身の「老病死」の事実を目を覚まし、今を生きる私を見つめるという意味がそこにあるのです。（浄泉寺若院・釋垂世）



「如是我聞」で始まる『仏説阿弥陀経』

令和4年(2022年)年忌表

ご法事（年忌法要）は、亡き人をご縁に、仏さまの教えを、今生きる私たちが聞かせていただく大切な機会です。浄泉寺本堂でご法事を勤めることもできます。

一周忌	令和3年(2021年)亡
三回忌	令和2年(2020年)亡
七回忌	平成28年(2016年)亡
十三回忌	平成22年(2010年)亡
十七回忌	平成18年(2006年)亡
二十五回忌	平成10年(1998年)亡
三十三回忌	平成2年(1990年)亡
五十回忌	昭和48年(1973年)亡

～ 浄泉寺からのお知らせ ～



浄泉寺筆頭総代の廣木辰夫さんより、浄泉寺本堂裏の境内墓地に水屋整備一式のご寄進をいただきました。これまでの水屋は屋根がなかったため、雨の日のお墓参りは大変でしたが、今回水屋に屋根をつけていただきましたので、雨の日のお墓参りも不便なくしていただけるのではないかと思います。ぜひご利用ください。廣木さんには、この紙面をお借りしてあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

<発行元・問い合わせ>



しんしゅうおおたには 真宗大谷派 楠林山 浄泉寺 電話 0799-22-4798
〒656-0026 洲本市栄町4-3-43
ホームページ <http://jyosenji.asei.info>